
閃光ゼロ距離センチメンタル！

鳴瀬るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光ゼロ距離センチメンタル！

【Nコード】

N8739S

【作者名】

鳴瀬るな

【あらすじ】

主食は野草！ドが付くほどの貧乏人でクラスでの立場も最弱。唯一取り柄があるとするなら半端じゃない生命力くらいのもの。そんな日々を生きるだけで精一杯の中学生男子がある日突然出会った女の子に恋をする。その女の子は自分よりも遥かにお金持ちで、高根の花。けど人には言えない秘密を隠していて……。徹底的にコメディにこだわったほのぼのラブバカコメディ。ただいま絶賛増量中です。

0

0

物語は最後まで読まないといけない。

白雪姫は一生目を覚まさなかったわけではないし。

赤ずきんは約束を破っても最後まで見捨てられなかった。

シンデレラもただのいじめられっ子では終わらない。

どうして？

それは一ページめくった先に大切な誰かが待っていてくれたから。

一度開いた人生を真剣に向き合う君を物語の主人公が応援している。

どんなに暗い世界でも、そこから救い出してくれる誰かは、誰にでも、平等に用意されている。

今はそれに気づいていないだけ。

だから大丈夫。

これは、

甘酸っぱくて。

恥ずかしくて。

目を覆いたくなるような。

そんな物語。

閃光ゼロ距離センチメンタル

学校という名の小さな世界。

教室という名の小さな社会。

三年二組に所属する藤崎梅介はクラスメイトとの著しい貧富の差に日々憤りを感じていた。

おかしいちょう

御櫛井町にある御櫛井中学校三年二組の四十人を内訳すると、

三十九人は毎日食べるものに困らず、健康的な体系を維持している。

一人は公園に生えている野草を主食としていて、栄養失調に苦しんでいる。

三十九人はシャープペンを使い、間違えた箇所は消しゴムを使って修正する。

一人はシャープペンはおろか、消しゴムさえも持ち合わせておらず、書いたら戻れない極限の緊張状態の中に身を置いている。裏切ることなく鉛筆は両側から削ったダブル仕様。

三十九人は一目で学生と分かる装いをしており、清潔感が漂う。

一人はまるで戦前の学生かと思うほどにボロイ学生服を着用しており、悲壮感が漂う。

結論。

三十九人は人間としての生活をしている。

藤崎梅介はギリギリ人間っぽい生活をしていた。

とはいえ自ら望んでゴリラ以上人間未満の生活を選んでいるわけではない。筆直に言えば、そうせざるを得ない。あるいはやむをえ

ない。または仕方がない。不可抗力なのだ。

理由は自宅が潰れる寸前のお好み焼き屋というバックグラウンドに加え、どうしてそこまで膨らんだのか、サマージャンボ宝くじの一等賞に当選しても一括返済できるか怪しいほどの借金を抱えていることにある。借金は細胞分裂のように借金を増やし、増えた借金がさらなる借金を呼び込む。借金が借金の客引きをしていた。残りHP1にもかかわらず、毒の沼地の中央にいる藤崎家は完全にお手上げだ。責任は他の誰でもない両親という名のダメ錬金術師にある。そんな大人の闇社会を梅介一人で打開できるはずもなく、毎日が生きるか死ぬかの『貧乏ビッグウェーブ』にのまれて過ごしていた。波に流されているのならまだいささかマシだったかもしれないが、藤崎家は溺れているのだ。それでも生きているというのは死神が遊んでいるとしか考えられない。

このようなゼロの位を数えるのもかつたるくなるほど多い借金が、他の生徒たちとの大きな格差を作るのは至極当然のことであり、服や食事、文房具、ノート一枚にしても差が顕著に表れてしまっていた。

中央に位置する梅介の席からは前を見ても、後ろを見ても、左を見ても、右を見ても、借金に悩まされている者などおらず、青春の塊がはじけ合っている。

神様は梅介だけにスポットライトをあて忘れたのだ。

前の席のやつは言う、

「昨日のテレビ面白かったよな」

梅介の家にテレビなど無い。あるのは終戦を伝えたことのある古いラジオだけ。ちなみにクーラーや洗濯機もないし、車なんて外国車が走り回っていたら追いかけて回したくなるほど手の届かない存在。ギブミーチョコレート。

後ろの席のやつは言う、

「私、明日誕生日なんだあ」

知らん。梅介の家にある記念日は『冠婚葬祭』の冠と婚と祭を抜

かした葬のみ。うまいものが食えるチャンスもこれだけ。親族が泣いてる最中、梅介は肉食獣のように出されたものを食い散らかす。葬儀は数年に一度やってくるバイキング。人の不幸は寿司の味。左の席のやつは言う、

「格ゲーやりにゲーセン行こうぜ。百円くらいあるだろ?」

藤崎家の一日の生活費である。殴られることで金が貰えるならまだしも、金を払ってまで二次元上のマツチヨと闘う余裕などない。それこそ本当にKOされてしまう。

最後に右の席のやつは言う、

「最近悩んでることがあるんだけど、ちょっと相談に乗ってくれませんか?」

唐突に相談を持ちかけたのは、芥川龍之介の代表作『羅生門』さえ脳内で恋愛小説に変換できるスキルを持つ岩倉智道。同小説には白髪の老婆が出てくるのだけど、こいつに掛ければシルバーアッシュの異世界少女に様変わりする。ここで紹介を切ってしまうばうだつの上がない変態で終わるのだが、実は野球部でピッチャーを任されていたりする努力家だ。

梅介は親友が悩んでいるのであれば、と今日初めてクラスメイトとまともに口をきく。

「なんだ? 困ってることがあるなら言ってみろよ」

その一言がきっかけで岩倉は口火を切ったかのように悩みを打ち明けた。

「実は俺、三年の美崎先輩とデートの約束を取り付けたんだ」

「誰だそれ?」

「でもな、幼なじみの鈴音とのデートも捨てがたいんだ」

「幼なじみ?」

「それだけじゃないんだぜ? 義理の妹のちゅは俺が付いててあげなきゃ……」

「ん? おまえに妹なんていたか?」

突然現れた二次元臭い家族構成と固有名詞。話の流れがおかしい

と気づいた時には既に手遅れだった。岩倉の火縄銃のように単発だったトークは連射タイプのマシンガンに変わり、

「要はハーレムルートに突入するためのフラグをどこで立てればいいのかわからないんだ。いやいや、それでも美崎先輩とちゆの二人と遊園地デートをするとところまでは進めたんだぞ。でも幼なじみの鈴音が乗り気じゃないんだよ。ここでうまく誘いださないと遊園地後の展開に期待できないだろ？ 選択肢が多すぎて難しいとはいえ、攻略済みのセーブデータを上書きするような行為は最低だし……だから俺もうどうしたらいいかわからなくてさ。やっぱり鈴音と先に約束を取り付けてから包容力のある美崎先輩とのデートをするべき……」

思わず未読スキップしたくなる内容に、黙って聞いていられるのも限界だった。梅介も負けじとマシンガンに持ち替えると目の前の馬鹿を口撃^{くちげき}すべく声を荒げる。

「うるせえ！ 人が真剣に相談を聞いてるつてのにバカみたいな話をしやがって。何が幼なじみの鈴音だよ。何が妹のちゆだよ！ そもそもさつきからおまえが早口で喋ってるのは日本語か？ おまえみたいに現実と妄想の区別がつかないような人間を相手にしている暇はない！」

真面目に聞いてやった自分が馬鹿だった、と梅介は再び机に突っ伏して耳を閉じた。朝食を食いつぶれているせいもあって苛立ちは凄まじい。きつと自身の名前を脳内メーカーで検索すると、全てが『飢』と『怒』で表示されるくらい最悪のコンディション。誰か梅介に『愛』を『友』を『幸』を。

「朝っぱらからイライラするなよ梅介。話があるつてのは本当なんだ」

懲りずに喋り続ける岩倉に、梅介は一瞬むくりと起き上がって言う。

「もう鈴音とかいうやつ一筋でいいだろ」

「ちがうちがう。二次元じゃなくてリアルの話だよ」

岩倉は、再び机に倒れ掛った梅介の肩をつかむと、現実世界での悩みであることを強調した。そして照れくさそうにある事実を告白をする。

「実は俺……彼女が出来たんだ」

印象的なのは岩倉の勝ち誇った顔。

一瞬の間の後、

「……鈴音に決めたのか？」

「ちがうつ！ 三組の宮内理奈だ。テニス部の」

ほれほれと言いながら岩倉はラケットを裁く動作をして見せた。

が、どう見てもスカートめくりをしているようにしか見えない動作に呆れる。

「寝言は寝て言え。寝て言ったところで宮内が被害者なことに変わりはないが。それにどうしておまえみたいな変態に彼女ができる？」

客観的に見ても正論な疑問。五分前までハーレムルートがうんたらかいたら、セーブデータの上書きがどうたらこうたら、こんなことを堂々と公言する人間に彼女が出来るとは到底思えなかった。

けれど岩倉の勝ち誇った表情は継続していて、

「忘れたか？ 俺が御櫨井中学名門野球部のピッチャーであることを」

テニスの次に今度はピッチングの動作をして見せた。整った投球フォームに、風を切り裂く腕、スナップの効いた手首。できるピッチャーだった。スポーツは興味の無いことだからと聞き流していたが、間違いなくいつぞやに聞かされていた事実だ。

「何回か二人で遊びに行ってたんだけどさ、昨日の放課後に告白したらOKもらえたんだぜ」

ギャルゲーをオートプレイにしながら素振りをするなど努力家の一面を持ち合わせる岩倉は知らないうちに現実と妄想の並行世界をうまく渡り歩いていた。

芽生える気持ちは、

僻み？

妬み？

嫉み？

いや、どれでもない無関心だ。

「よかったじゃないか。がんばれよ」

「驚かないのか？」

「ああ、俺そういうの興味ないからな。別に愛とか恋とかで腹がいっぱいになるわけじゃないだろ。俺には宮内とかいうやつよりも、惣菜コーナーで試食させてくれるおばさんの方がよっぽど魅力的に映る」

発言に恥じる余地はない。これが嘘いつわりのない事実なんだから。

「終わってるよ梅介。おまえはもう既に死んでいる」

どこかワイルドさに欠ける丸刈りのケンシロウが叫んだ。

「いや、そんなことはないぞ。確かに腹は減って死にそうではあるがまだ確実に生きてる。ほら現に今こうやっておまえと会話する余力は残って……」

「ちっ、ちがう！ 人間は恋によって成長していくんだ。わかるか？」

顔を真っ赤にした岩倉は両手で机を叩いて熱弁する。聞いているこちら側まで顔が赤くなってしまうような主張は価値観に激しい差のある梅介には届かない。

「なるほど。だったら俺は胎児だな。生まれてこのかた恋なんぞしたことはない。第一、恋って誰に対してだ？ 人か？ 俺は女子どころか人間がおいしそうな家畜に見えるぜ」

瞬間、本人は自分の言い過ぎた発言に反省した。これじゃあまるで猟奇殺人犯。あるいはジャングルの奥地に住む獣^{けだもの}。言葉のあやで梅介に人を喰らう趣味はない。

だがそのお返しは、違法性のある刃渡りナイフのように鋭く突き刺さるクラスメイト達の視線。聞こえてくるヒソヒソ話。シャープペンの芯が山盛り刺さった消しゴムまで飛んでくる。女子に至って

は悲鳴を上げる者も出た。

「マジかよあいつ。人じゃなくてヒトなんじゃねえの？」と冷静な分析をする鈴木。

「貧乏だから仕方ないだろ。好きって言うだけでエネルギー使うんだから」と切り込む高橋。

「きゃっ！　へっ、変態！」と怯える坂下さん。

「ちよっ、ちよっところち見ないでお願いだから」と懇願する相沢さん。

「藤崎サイテー、きもーい」とモスラ顔の女子であだ名はブスラ。ガールズビーアンビシャス。

「そんなこと言うとかわいそうだろ。中にはそういう奴だっているさ」と声色を変えて他のクラスメイトに成り済ます藤崎梅介。

怒声がサラウンドで聞こえる。

場所は地獄の本尊。

状況は阿鼻地獄。

孤独死しそうだ。

「それにしても……」

岩倉が中学生のマストアイテムをポケットから取り出して言う。

「梅介はケータイも持ってないもんなあ。それじゃあ恋愛もできないよな」

岩倉の言うとおり。最近の中学生ならほぼ誰でも持っている携帯電話さえ持ち合わせてない梅介にとつての唯一のコミュニケーションツールは『大声』。限界があつた。

だが持論は譲らない。

「仮に一億歩譲って俺が恋をしたとしよう。しかし何故ケータイが必要なんだ？　手紙があるだろ」

と、その瞬間、

「きゃああああ　！」とドヤ顔の梅介を見て絶叫する坂下さん。彼女は震える体を温めるように両腕をこすって鳥肌を静めようとしている。寒くて寒くて凍え死にそうといった様子。

「おい待て。俺の発言のどこにホラー要素が混じってるんだ」

そんな梅介の発言など、

無視。

無視。

無視。

優しく梅介の肩に手を置いたのは岩倉ただ一人だった。梅介を見て静かに首を横に振る。まるで医者のご愁傷様ですという時にありがちな動作。どうやら梅介のクラスでの立場は死人らしい。

金もなければ学校での地位も最弱。もはや梅介には自分が学生なのか無職なのか立場が曖昧に思えた。

2

世の中で、生きている瞬間の中で、そして宇宙万物全てにおいて、これほど幸せな時があるだろうか。

2

あと五分、あと四分五十九秒、あと四分五十八秒、と、テロリストが自爆テロでも企んでいるかのようなカウントダウンを五分前から秒刻みに開始。こけた頬に、うつろな瞳、不気味な表情も相まって疑惑は高まるが、当の本人は至って純粹に、その先に待つ何にも代えがたい給食の時間の到来に胸の鼓動を高鳴らせていた。

どんなにクラスメイトに人ではなくヒト扱いされようと、歩いているだけで理由なく叫ばれようと、給食というメインイベントのために登校しているといっても過言ではない。どこか自分が学校にいるのはまさにこのためだ。これを逃せば、翌日の給食まで野草を食って寝るだけ。ウサギ小屋でキャベツを頼張るウサギの方が栄養面だけを鑑みると、いささか生活水準が高い。給食があるからこそ俺はウサギに勝てるんだ。そんなことを残り二分三十六秒に思う。けれど待ちわびていた瞬間は自分の予想よりも遥かに早くやってきて、

「はい、ちよつと早いけど今日の授業はここまで」

授業そっちのけでカウントダウンを続けていた梅介には、どこからが始まりで、何がここまでののかはさっぱり。ただ、死体のように突っ伏していた人間にとって、この時ばかりは既婚者四十歳の女性教師が僧侶に思える。それはもう、どんなにかわいいクラスメイトよりも魅力的な女性だ。

「おーい、生きてるか？」

終了の途端、右隣から岩倉の生存確認。

人生という大きな闇に遭難している梅介は顔をわずかに持ち上げると、声の通るスペースを作ってやってから返事をする。

「おう……なんとか」

「よしよし、今日もちゃんと持ちこたえたな」

岩倉はホツとした表情を見せてから、よくやったと肩を二度ほど叩いた。

今一番欲しているのは野郎の賞賛よりも飯という名の固形物だが、悪い気はしない。今日も自分は死神との駆け引きに勝ったのだ。

「いつも心配してくれてありがとな」

「心配？ ああ、心配っていうか……」

岩倉は何かを言い淀んだのち、

「自分の隣の席のやつが餓死されると後味悪いだろ？」

だったら唐揚げの一つでも家から持ってこいよ、と喉まで出かかったが、そんなことを言ってこれ以上、下がりようのないクラスでの地位を無理に掘り下げにかかるのは利口じゃない。油田じゃあるまいし、掘り続けたって出てくるのは混沌とした明日だけだ。

「自分の身近な人間が、しかもそいつはクラスメイトで、さらに俺の隣の席、もつと言えば友達で、餓死って結構身近にあるものなんだな」

「餓死っていうなよ。まだ生きてる」

「ははっ、まあまあ、今日もいつも通り誰よりも多く食してくれ」

「言われなくてもそのつもりだ。油断してるとおまえの分も奪ってやるからな」

そうそう、確実に一つわかっていことは給食の時間が到来したというまぎれもない現実。誰に何を言われようと本人にはそれだけで十分。

だから目の前に黄色い食器が運ばれて、トプトプとお碗いっぱいにおスープが注ぎ込まれる頃には、違う世界にトリップしてしまいそうになるほど幸福を感じる。

「おい岩倉！ 今日の卵スープ……なんかめっちゃキラキラしてる

ぜ！」

「いつもとかわらんだろ」

「良く見るよ！ 黄身と白身の混ざったとき卵が楽しげに泳いでる！」

ほらほら、と両手で持ったお碗を見せるものの、岩倉はかわいそうといった表情で、

「梅介は本当に幸せのハードルが低いな」

確かに。ただ低いのではなく、著しく低い。

かつて十円玉を拾って神に感謝したことがある。しかしその夜は十円という大金をねこばしてしまったことに悩まされてなかなか寝付けなかった。翌朝交番に届けると、お巡りさんに『正直ものには良いことがある』と言われ、百円玉を渡された時には、自分がわらしべ長者の主人公になったかのような錯覚を覚えた。そして手持ちの百円玉を全て十円玉に両替して、毎日交番に届ければ、毎日百円玉が貰えるだろうと踏んだ梅介はせっせと運び続けたが、四回目のある日、あれだけ優しかったお巡りさんに鬼の形相で怒鳴られた。こうして現実の厳しさを知った。

このように幼少から鍛えられてきたメンタルに死角はなく、

「こっちの食器にもよそつてくれ！ じゃぶじゃぶ頼む！」

禁断の一人二食器。

もらえるときにもらっておく貧乏精神をいかに発揮していた。

二倍の卵スープに、

二倍のわかめご飯に、

二倍の焼き魚。

もちろん牛乳だって二倍。

梅介は揃ったメニューのバランスの良さに安堵のため息をついた。

「最近ビタミンが不足してたんだけど……これなら安心だな」

「……仕事の忙しいOLみたいない方するなよ」

意味合いは全く違うのだが。

さすがの栄養士さんも、まさか一日の栄養の全てを給食で賄って

いる生徒がいるとは考えもしないだろう。金曜日に至っては土日を含めて三日分の栄養として給食を胃袋に収める。ここは学校だ。ユニセフじゃない。

しかし、給食を教会の炊き出しと同等に考えている男は貪ることを止めない。

二倍あつた卵スープは消え、

二倍あつたわかめご飯も消失し、

二倍あつた焼き魚は骨さえ見当たらない。

「おい梅介！ そんなに急に栄養入れると気絶するぞ！」

餓死の次は栄養取り過ぎの心配。岩倉の不安も絶えない。

が、そんなことを余所に、

「大丈夫だ。少なくともこれを全部飲むまでは倒れてたまるか」

「それは……牛乳だよな？」

「おう」

「なんでヤクルトみたいな速度で飲むんだよ！」

もちろん日頃、野草を主食としている人間に給食費を納められるほどのお金は持ち合わせていないのだが、誰も梅介を無銭飲食と咎める者はいない。正確に言えば、いくら貧乏であっても、まさかこれほど給食を根こそぎ奪っていく人間が給食費を納めていないなんて思いもよらないのだ。いったいどうして残り一個のプリンを獲得するためのジャンケンに堂々と参加している人間が未納だと想像できるだろう。しかもそいつは既に競争に勝って意気揚々と戦利品を右手に掲げている。その勝率、実に八割を超える。食べ物が絡んだ時のジャンケンは神がかり的に強かった。

芸は身を助けるを地で行く梅介は席に戻り、収穫したプリンを『スクールバッグ』ならぬ『スクールポリ袋』に入れると中断していた給食を続ける。

「あれ？ プリン食べないのか？」

机を向かい合わせにした岩倉が不審そうに尋ねた。

「おう、妹にあげようと思ってさ」

「ああ、笹乃ちゃんにか……」

そう納得したかと思いきや、すぐに首をかしげた。

「ん？ でも笹乃ちゃんだって一年の教室で同じメニュー食べてるだろ？」

「プリンはいいつの好物なんだ。だけどあいつは引ッ込み思案だからな。きっと俺みたいに図々しくプリンジャンケンに参加してない」

兄は日頃から弱肉強食を説いているものの、二つ年下の妹 藤

崎笹乃は食いつばぐれることが多い。梅介にとってはそれが大きな不安要素だ。けれど、自分の妹とは思えないくらい繊細で、子猫を見かけると高級菓子と呼んでいるクッキーまで与えてしまう笹乃の優しさもまた誇らしかった。

「ほらよ」

コツリ、と自分の机に置かれた やっ、やややっ、やっ、やわらかプリン！

さつきも手に取ったはずなのに、三個目のはずなのに、何度見ても美しいフォルム。雑に扱ったらテープが切れてしまいそうなほど神経質なキミ。やあ、また会えたね。

「いつ、いいのか？」

「勘違いするなよ？ 梅介に、じゃなくて笹乃ちゃんにだからな」

「岩倉……おまえやっぱいい奴だな」

「俺はいつでもかわいい女子の味方だ。それがたとえ二次元であろうと親友の妹であろうとな」

「笹乃を二次元と同じグループに入れてほしくないが……とりあえずさんきゅ。笹乃が喜ぶ」

ビニールの伸びきったスクールポリ袋に、

元々配られた自分のプリンと、

ジャンケンで獲得したプリンと、

岩倉の気持ちのこもったプリン、

夕飯のデザートにもきゅもきゅとハムスターのようにプリンを頬張る妹の姿を想像すると、しかめっ面なデフォルトの表情に笑みが

浮き出た。

「プリンをあげる代わりと言っちゃ何だが……」

「ん？」

「人が飯食べてる前でニタニタ笑わないでくれよ」

ニタニタとは失礼な、自分は妹の喜ぶ姿を想像してさわやかに笑っているんだ。

が、その想いと現実違った。

教室の窓ガラスに映る自分の姿は、脳内で描く微笑ましい兄とはかけ離れていた。

決して造形が悪いわけじゃない。だが、漂う哀愁に加えて、目がひどく淀んでいるのだ。思わず高校はどれくらい留年してるんですか？ とか、ネットゲームは一日何十時間ログインしてるんですか？ などと、とてつもなく失礼な質問を投げかけなくなるほど青春とはかけ離れた存在。当人の知らないところで笑顔の裏に闇が潜んでいた。

ただ、それに気づいた時のショックも大きく、

「あああああ……」

梅介は窓ガラスに映る自分の姿に　これが俺の実態なのか？

とでも言いたげな表情で口を尖らせながら固まった。まさか自分がこれほど疲れ切ったツラをしているとは。今までずっと死神に弄ばれていると思っていたが、これでは自分の方が死神ではないか。故に自分は人間ではない。岩倉！　俺に命を刈られる前に逃げるんだ！　そんな極論にまで到達した。

「あああああ……」

未だ茫然自失と佇む梅介に、岩倉はスープをすする手を止めて言う。

「どうだ？　イメージチェンジしてみたくなっただか？」

もさもさと目の前の梅介の髪の毛をいじくる。もちろん否、ワックス。否、ドライヤー。否、クシ。石鹸で清潔にしているつもりではあるが、トリートメントの類は生まれて一度も使ったことがない。

「あああああ……」

「おいっ、いつまで唸ってるんだよ！」

「おあ？」

「俺はおまえの気持が痛いほどよくわかるぜ。うんうん、金もなけりゃ、格好もダサイ、女にも持てないし、それじゃあ人生の幕を下ろしたくなるよな」

「……そこまで思ってたが」

「あつ、ああ、そつ、そうだったか、すまん、つい」

「けど確かに、窓に映る俺の姿はただ者じゃなかった。呪い殺されると思ったら相手は自分だったなんて経験おまえにあるか？ 理由なく謝罪したくなるほどだ」

これが幼少から積み重なった『苦勞』のもたらした悲劇。苦勞は買つてでもしろと誰かが言っていたけれど、本当にこんな風になりたいやつがいるなら在庫切れになるまで自分の苦勞を売りさばいてやりたい。マジでガチに梅介はそう思う。

「けどな、それと俺がイメージチェンジするのは別の話だ」

「顔の造りは悪くないんだからもったいないだろ」

「そうじゃねーよ」

決して岩倉の答えが的外れなわけじゃない。かといって梅介が間違ってるわけでもないし、これは互いの価値観の違いが生んだちょっとしたズレ。

「見た目を良くして何の得があるんだ？」

「笹乃ちゃんだって兄貴がカッコいいほうが嬉しいだろ？ 健気に貧乏だつてばれないように出来る限りのオシャレをしてるじゃないか。でも兄貴がこんなじゃ、笹乃ちゃんにいつか愛想尽かされるぞ」

笹乃に愛想を尽かされる？

「回想」

「ほらっ、笹乃。今日は三つもプリン貰ってきたぞ」

「ふーん」

「どうしたんだ？　これおまえの好物だろ……」

「だから？」

「だからっておまえせっかく俺が貰ってきたのにそんな言い方……」

「うるさい！　そんなものいらないし。汚いから寄らないでくれる？」

「回想終了」

嫌だ。

厭だ。

否だ。

そんなの絶対ダメ。

笹乃を引き合いに出された梅介は怯む。とはいえ心配せずとも、本人が思っている以上に笹乃は兄想いの良い子なのだが。

「でっ、でも、これでも俺なりに気を使ってるんだ。本当は石鹸だつてケチりたいくらいだし。そもそも金が無いんだからオシャレなんかできるわけないだろ……」

歯がゆいを通り越して痛い。

「金が無くたって、普段よりも少し自分に気にかけてやるだけでだいぶ変わるもんだ」

「変わる？」

「そう、簡単にな。例えば毎朝自分の姿を鏡で確認するとか、そんな誰でもしていることを欠かさずしていれば、さっきみたいに自分に殺されそうになったなんていう馬鹿げた現象は起きない」

「たっ、確かに。あんなにすっかり自分の姿を見たのは何年ぶりだったか……」

「つまり梅介、おまえは金が無いことを理由に身だしなみどころか

青春を怠っている！」

ズガビーン！

思わずそんな効果音が聞こえてきそうな衝撃が脳裏を突いた。
おかまいなしに岩倉は言葉を続ける。

「それに……」

「まだあるかのよ？」

「……梅介がイメチェンすれば彼女が出来るかもしれない」

またその話か、と思う。

しつこい朝の延長戦に、何度も言わせるなど、まとわりつく恋バナを乱暴に振り払おうとしたが、朝の失敗は確実に自分の糧になっ
ていて、

「まあ、俺も機会があれば、その、彼女探してみるよ」

思ってもいないことをうまく口にできた。

けれど、自分が普通の人間であると思ってもらいたいばかりにし
た無難な返答は自身の首を絞めてしまい、

「そうと決まったら昼休みに何人か女の子呼んでくるから、少しお
喋りしてみるよ。な？」

「いやいや、そんなに積極的に彼女をつくる必要は……」

「よしっ！　じゃあジャンケンで俺が勝ったらイメチェンで女の子
とお喋り。梅介が勝ったら明日の給食のデザートもやるよ。どうだ
？」

ジャンケンの勝率八割の梅介にとって岩倉の申し出は絶好の機会。
だが、

俺の人生はこういう大切な局面でいつも負けてきたんだ。

2 (後書き)

意図的に一人称と三人称を混ぜていますが、あまりに不自然な個所がありましたら一報くださいませ。

場所は三年二組からもっとも遠い体育館の男子トイレ。

生徒がめったに利用することのない学内の辺鄙なこの場所で、藤崎梅介は食事中の恍惚とした表情が嘘だったかのように、うなだれながら鏡の前に立ち尽くしていた。

「めんどろなことになるっちまった……」

給食を大量に食したまでは良かった。

わかめご飯なんて、すっかり米とわかめが混ざり合っていておいしかったし。

焼き魚は自分が猫だったらあまりのうまさに失神してしまうんじゃないかってくらい。

プリンだって三つも手に入れることができた。

でも、

「まさか岩倉にジャンケンで負けるとは……」

純粹に負けただけならいい。明日のデザートという甘美な響きに負け、イメチェン&女子とお喋りという軟派な状況を作ってしまったことに絶望を感じていた。

「あんな約束するんじゃないかったな」

元凶である右手を睨み、何度呪ったかわからない呪いを再度かける。次からは左手を使うからな、と右手に捨て台詞を吐いてから、くたばれ！と暴言でたたみ掛けた。一通り気が済むと、ポケットに忍ばせていたスーパードワックスを取り出す。

その名は　バリ立ち。商品名だけを聞かされたら、きっと怪しげなブツと勘違いしてしまいそうなネーミングセンス。もちろんジャンケンの勝者である岩倉から手渡されたものだが、あいつ自体は

野球部で坊主頭。どこにも使う余地がない。よって他の生徒に借りたものだった。

そう、他の生徒から。

梅介にはここに一つ懸念すべき点があった。

親友同士のたわいもない悪ふざけという垣根を越えて、巻き込んでいる範囲が徐々に広がっているような気がしてならないのだ。ワックスを貸してくれた武田及び、今回のお見合いのために家庭科室を貸し切りしてくれた委員長の松坂、美術部の木下なんてわずかな時間で『ワイルド系男子に出会いたい女子必見!』と称した虚偽表示のビラまで作成して学校中に配り歩いている。某イケメンアイドルの写真を切り抜いて貼り付けているあたり、悪質にもほどがある。だがそれらの理由はみんな極めて単純なことで、

めっちゃめっちゃ面白いことが起きそうだから!

体育祭でもまとまったことのない三年二組が動く活力はそんなところにあつた。

今や梅介は退屈な毎日にスパイスを与えてくれるヒーロー。今朝までシャーシンのてんこ盛り刺さった消しゴムを投げつけられていた人間にしては飛躍的な出世だが、本人にとっては迷惑極まりない。梅介は一息ついてから、ワックスの蓋をぎこちなく回す。

「にしても……」

蓋がパカツと音を立てて開いた。

「ワックス一つでコレがどうにかなるのか?」

梅介には鏡に映る自分の姿が『油』一つでどうにかなるものとは到底思えなかった。一番の問題点は髪型ではなく、ボロボロの学生服から強く漂う哀愁。加えて、目が淀みきっていること。所詮こいつを使ったところで死神から悪魔に変化するくらいのもものだろう。バリ立ちに疑いのまなざしを送る。

「まあ、てきとーにやってさっさと終わらせるか」

とりあえず中指でワックスをすくい上げてみる。ひんやりしていてぶるぶるとした質感に、立ち込めるフローラルな香り。今が昼過

ぎで本当に良かった。早朝だったらヨーグルトと勘違いして舐めていたかもしれない。そんな風に梅介は少し舐めてみた事実を無かったことにした。

そのせいだろうか、バリ立ちにさっそく洗礼を浴びせられる。

「んー、えーと、これを……ん？」

必ず訪れると思っていた困難は予想だにしない早さで訪れた。

まずは使用するべきワックスの適量がわからない。

次にそれをつけるべき場所がわからない。

何を満たせば完成なのかも曖昧だ。

自分がワックスに対して挑戦できたことは蓋を開けたくらいのもので、ちよつと舐めてみるなどという愚行を働いている場合ではなかった。

かといって、ただ黙って立ち尽くしているわけにもいかず、意を決した梅介は恐る恐る微量のワックスを両手でこねくり回してから、ぺたぺたと撫でるように髪の毛につけてみる。一步前進したか否、何の変化もない。

今度は少し多めに指先に付けてから再び同じ動作を繰り返してみるが、それでもやはり大した変わり映えはしない　　と見せかけてえっ！

「おおおわっ！　しまったああ　　！　前髪が海藻みたいにヘターって！」

ただでさえ要領の悪い梅介は突如現れた海の幸にパニックに陥ってしまいそうだった。

前髪から滴る白い液体。

固まった人差し指と中指。

昼練習でうるつくバスケット部の気配。

少ないメモリで懸命にあたふたと対処に追われるが、やらなければならないことの多さにフリーズ寸前。そしてそのまま倒れるようにシャットダウンして

たまるかぁ！　と男の意地で踏ん張った。

そんなあがきにも似た悪戦苦闘は続き、

「くそつ、こうなったら奥の手だ」

梅介は鏡に背を向けて髪をぐしゃぐしゃにしてから、はたくようにしてランダムにいじった。ダメでもともと。どうせダメなら最後は運だめし。最高の髪型になっていてほしいなんて贅沢は言わない。元の髪型か、それと同等になっていてくれればいい。バリ立ちに命運を託す。

願わくば女子が集まっていませんように。

いた。それも大量に。解禁された漁のごとく。

梅介はお見合いの開催場所である家庭科室に着くと、女子たちに^{さき}覚られないようにこっそり室内を覗いた。ざっと数えただけでも二十人はいる。みんな『ワイルド系男子』のうたい文句に釣られてやってきたのだろう。クラスに生息する絶対数よりも多い。

だが藤崎梅介という人間は特段、女子と喋ることは苦手ではない。厳密には女子が存在しないのだ。梅介にとっての女子は男子も含めて『人間』ではない。

しかしそれは今朝までの持論。いかんせん自分を待つ乙女の瞳は眩し過ぎた。今日ほど女子という性を意識した日はない。今、この瞬間も、一秒ずつハードルは上がり続けているだろう。自分はおまえらの期待するような人間ではないと一人一人に釈明して回りたいくらいだ。

「……逃げちまうか？」

ふと過ったアンモラル。でも約束はしてるんだ。ここで何も言わずに逃げるだなんてことはできない。恋愛に対しては否定的だが、友達との約束を無下に破るほど腐っちゃいない。

ならば、

「僕は受験勉強で忙しいんだ。君たちもくだらないことをしている

暇があるなら英単語の一つでも覚えたらどうか？ Appleの発音はアップーだよ君たち。キリッ！」

ダメだ。生活費をねん出するために教科書を全て売り払った奴がこんなことを言ったところで誰も納得しないだろう。三年二組は馬鹿じゃない。

では今度はちよつとウケを狙って、

「給食も頂いたんであつしはこのへんでしつれいしやす。げへへ。すいやせんね。持病の癪が……」

無理だ。通用するわけがない。そもそもどこがウケ狙いなんだ？ 明日から席が無くなっているのは必至。

どうしたものか 梅介の脳裏で様々な思いが交錯する中、突如背後に人の気配

「おわっ！」

「うわっ！」

振り返った梅介の視界に近距離で映る十二力。

対象物が認識できるまでにピントが回復すると、

「なんだ岩倉か……驚かせるなよ」

見慣れた顔に落ち着きを取り戻した。

あらかじめ梅介の後姿を捉えていた岩倉が先手を取って言う。

「ワックス初めてだつて言つてたよな？」

「そうだけど……やっぱりおかしいか……？ ちよつと付け過ぎたかもしれん……」

何とも言い難い妙な間が支配したのち、

「どうしたんだよそれ！ キメキメじゃん！ 前髪の無造作加減がハンパねえ！ やつとやる気出してくれたんだな？ 信じてたぜ梅介！」

岩倉は「感動した」と叫んでから梅介の華奢な体を抱きかかえるようにして抱擁した。丸坊主の男にゼロ距離で密着されるのは不快感以外の何物でもないが、それ以上に今回のお見合いに意気込んでいると思われるのは本意で、

「いやっ、ちがつ、これは、そのっ、バリ立ちが勝手に！」

手に持っていたバリ立ちを指さして説明するが、

「何をわけの分かんないこと言ってるんだ？」

弁明もむなしく、岩倉は家庭科室にいる任務遂行メンバーに『何かわかんないけど梅介のヤツ気合入りまくってる』と大声で連絡事項を伝えると、両腕を使ってマルを作ってみせた。同時に女子たちも黄色い声援を上げて盛り上がる。もはや彼女たちの脳内ではワールド系男子が『ふんっ、今夜おまえらを頂きにいくぜ』と言って意気込んでいるに都合よく変換。ハードルは世界陸上の選手でも超えられないほどの高さに跳ね上がった。いた。

「おい岩倉！　どこの誰が気合入ってるって？　俺は約束だから来てやっただけであって、女子なんかに興味はないし、さっさと終わってほしいと切に願ってる」

本当に、本気で、マジな真理だが、説得力はなく、

「よくいうぜ、そんなファッション誌ばりの髪型にセットしたくせによ」

「だからこれはてきとおおゝに髪をはいたらたまたま……」

「はいはいそうだったな。適当にいじったら偶然キメキメになっちゃったんだよな？　ぐ、う、ぜ、ん。おっと、せっかく髪型がキメキメなのに服がそれじゃ話にならないよな」

一度自宅に戻ったらしい岩倉は大きな紙袋から私服を取りだして不敵に笑うと、梅介に一つずつ手渡した。

「なんだこれ？」

「いいから俺を信じてこれに着換えろ」

岩倉から受け取ったのは、

少し緩めで色落ちしたデニムパンツに、
くすんだ灰色のカットソーと、

チャコールのストール。

「おまえ……普段こんなもん着てんのか？」

「いいから俺を信じろって」

しやらくせえとでも言いたげな岩倉は、梅介からほぼボタンの意味をなしていない学生服を奪い取ると紙袋にしまい込む。

「返せよ」

「ダメだ」

「学校に私服の奴がいたらおかしいだろ？」

「戦前みたいな学生服着てる方がおかしいだろ？」

「おい」

「うす」

「なんだようすって」

これ以降何を言っても謎の『うす』の二文字しか発しない岩倉に対し、結局、お見合いが終了したら即座に返却ということで折り合いた梅介は、その場でもそそと手渡された私服に着換え始めた。

「うん、似合うじゃん。やっぱり梅介はツラは悪くないからな」

褒め言葉と共に、野球部のごつい手が梅介の鎖骨を二度ほど叩く。けれど叩かれた本人にはどこが自分に似合っているのかわからないし、普段着ている擦り切れたシャツとは違う着心地に強い違和感を持った。

「着なれてないから気持ち悪いな……やっぱり服返せよ」

「うす」

「わかったわかった。今日だけは着せ替え人形になってやるよ！」

「よし！ あんまり女の子を待たせるのもアレだし、そろそろ行くか」

岩倉は梅介の首に巻きついたストールを正すと、手錠よろしく強く腕を掴み、

深呼吸する間もなくその時は来た。

「主役の登場です！」

そんな岩倉の声が聞こえて、

押し込まれるように一歩踏み出して、

スポットライトよりも眩しい乙女の瞳にさらされて、

どれくらいの時間が経っただろう？

それは梅介が『こんなくだらないうこと止めようぜ』と言おうとした時に起きた。

きゃあああああ　！！

湧き上がる、舞い上がる、二十人の乙女から発するフルパワーの歓声。そこそこ広いはずの室内に野郎よりも二オクターブ高い声が満たされた。

即座に梅介はこの叫びがどちらの意であるか探るが、答えは一目瞭然。偶然とはいえ、気だるい系とワイルド系が上手く入り混じった梅介に、女子たちは羨望のまなざしを送っていた。

右を見ても、

左を見ても、

甘い香りを撒く女子ばかり。

本人はただ冷や汗をかき散らしながら挙動不審に辺りをうかがっているだけなのだが、それが女子たちには『どの子から食べちゃおうかな……』と今夜のごちそうを見定めているように見え、さらに目があった女子に戸惑ってすぐさま視線をずらすという動作が『はあ……おまえら俺以外に見るものねえのかよ？ まったく……仕方のない子たちだ』というセックスアピールに映った。

いまや彼女たちに見えているのは普段のドがドドド……と永遠に付すほどのド貧乏人、藤崎梅介ではなく、強引に持ち上げた無造作ヘアと淀んだ瞳がやんちゃを漂わせるワイルドな男。赤丸急上昇中だ。

「ねえねえ、あんな人うちの学校にいた？」とギリ過ぎるミニスカートの子。

「何で私服なのかわかんないけどちょーかつこいい！」と発育の良すぎる女子。

「誰から行く？ 私から行ってもいい？」とぼつてりした唇の色っぽい女子。

御檜井中学の一室で奇跡^{ミラクル}が起きていた。

岩倉も梅介に続けと、クルクルと華麗なターンを決めながら入

室すると、

「本日、お見合いを開催いたしました、私が責任者の岩倉智道……
って君たち！ 彼に直接触れるのは厳禁だよ！ 一人ずつ順番に始
めるから並んでくれるかな？」

急な仕切り屋の登場に、誰かから舌打ちが聞こえた。さすがの岩
倉も一瞬怯んだ様子を見せてカジノオーナーさながら広げていた手
を下ろしたが、持ち前のポテンシャルで持ち直すと、せっせと手製
の番号札を配り始める。

ここは家電量販店で、なおかつ今日は新型ゲーム機の発売日かと
勘違いしてしまいそうなほどの混沌とした状況に、梅介はただただ
啞然としていた。

「俺はいたい……」

ここで何をしているんだ？

3 (後書き)

ゴールデンウィークをこいつに捧げました。
少しでも笑っていただけなら嬉しいです。

バブル、必ず泡となるはかないもの。
メッキ、いつか剥がれてしまうもの。

一発屋、今の藤崎梅介の状態のこと。

偶然と必然がうまく混ざり合い、梅介は一瞬にして破滅への三種の神偽を身にまといてしまっていた。『どの子からいこうかな』と言わんばかりの肉食な見た目に、『早く帰りたい』と草食な心の声。ルックスに対してメンタルが全くとっていいほど噛み合っていない。

だがそれは梅介に限ったことではなく、三年二組のメンツも、

「おいおい、あれほんとに藤崎かよ」と指をさして驚愕する中村。

「これじゃあ俺がクラスで最下位になっちゃう」と何かに怯える岡安。

「昔の藤崎を返せ！」と実は密かに想いを寄せていたツンデレなブスラ（ 1 参照）。

などなど、兎にも角にも家庭科室という閉ざされた空間は三者三様、十人十色で百人百様の思いに溢れ返っていた。

まさに喧騒 いや、狂騒か。文字通り狂ったように騒がしい。室内には男子と女子が『2：8』の割合で詰まっているのだ。彼女たちの名札を見ると、隣のクラスの子や、遠く離れたクラスの子、下級生までもが混ざり合っている。

全ての女子に整理券を配り終えた岩倉は、パンパンと手を叩き、
「一番の子から順番に並んで！」

ふんぞり返って椅子に座る梅介の目の前に列を作った。初めこそぎゃあぎゃあと騒いでいた女子たちも、いざお見合いが開始される

となると、三年二組の規制におとなしく従う。視線の先には尊大な態度で待ち構えるワイルド系男子。

まずは丁寧なアイロンがけを欠かしていない清潔感のある女子（整理番号札1）が梅介に向かい合って席に着く。この状況をセツティングした岩倉を含めスペシャルサンクスである三年二組が見守る中、梅介は失礼にもカタカタと貧乏ゆすりをしながらひたすら時間が過ぎるのを待っていた。

先に切り出したのは女子の方。

「こつ、こんにちは、よろしく願い……します」

対して梅介は憮然と、

「……おう」

自分は既に約束の八割は果たしているんだ。あと二割は適当に相槌をしながら女子の話を聞き流せばいい。これが終わればいつも通りの平穏な日常に戻る。そんなことを思いながら明日の給食に想いを馳せていた。

ただし女子にしてみればそうはいかない。目の前のワイルド系男子と少しでもお近づきになるべく質問の嵐。

「お名前はなんですか？」

「藤崎」

「下の名前は？」

「梅介」

「珍しくてカッコいい名前ですね」

「どうも」

なにも梅介はこの女子のことが嫌いで横柄な態度を取っているわけではない。むしろ今回このような形で呼び寄せてしまったことを申し訳なくさえ思っている。自分は彼女たちの思うような人間ではない。だからこそ本音をさらけ出し、嫌われることで茶番劇を一分でも早く終わらせようと試みていた。

「ずいぶんオシャレな洋服ですね。どこで買ったんですか？」

「借り物」

「あつ、そうなんですか。似合ってますよ」

「どうも」

「普段はどこで買ってるんですか？」

「買ったことがないからわからない」

「……えーと、それは……どういう意味で……？」

「二度言わせるな。人生で服を買ったことは一度もないと言ってるんだ！」

女子は「ひいっ！」と小声で悲鳴を漏らし、

岩倉は「はあ……」と呆れてため息を漏らした。

それでも喰い下がる女子は、

「じゃっ、じゃあ服はどうやって手に入れて……？」

「服や靴は拾うものだ」

ミステリアスな回答に誰かが『RPGかよ！』とツツコミを入れた。恋愛経験値0の梅介はヤジを気にも留めず、赤裸々にライフスタイルを告白する。

「服だけじゃない。食べ物だって拾える。ほら、公園に生えてるだろ？」

再び誰かが『薬草かよ！』とツツコミを入れた。梅介の私生活をRPGに例えればウケが取れるとわかった三年二組は調子に乗って『いつまで棍棒を装備してんだ？』とクオリティの低い持ち物を比喩したり、『俺の家のタンスを勝手に開けるなよ！』とクラス会議に発展しそうな念押しをしたり、『ぼうけんのしよは消えてしまいました』などと毎日がゼロスタート同然の生活を指摘したりと好き勝手なことを言う。青ざめた岩倉が止めるまで暴走は続いた。

再び室内が静かになると梅介から女子に、

「他に聞くことはある？」

珍しく気を回したつもりだったが、さっきまでの質問の嵐はどこへやら。女子の表情の雲行きも悪い。雷が落ちなければいいのだが。室内には着せかえただけではかき消せないオーラがもくもくと雨雲のように充満していた。

女子はようやく引出から見つけた質問を恐る恐る伺う。

「えっ、えとえと、そのお、じゃあ趣味は……？」

「ない」

「一つもですか？」

「まあ、あえて言うなら給食かな……ん？ でも給食は必要不可欠なものだから趣味とは言わないか。テレビもないし漫画もないし、暇つぶしに妹を眺めてることが趣味と言えなくないかもな」

この頃になると、目の前にいる女子のみならず、配布されていた整理券が徐々にジンバブエドルのようなハイパーインフレをみせていた。待つ価値は無いかもしれないと思った女子が順番が早く回ってこないなら帰ると言いだし、それに対して岩倉は『3・5番目』のような三番目と四番目の中間に位置する新しい整理券を猛スピードで発行するが、安易な政策のせいでその他の整理券の価値が著しく低下し、大きな混乱を招く結果に。

このままでは昼休みという大切な時間を意味もなく失ってしまうと思った女子たちは、何かがおかしい……と疑わしい目で梅介を値踏みする。その頃、岩倉は女子を引き留めるために性懲りもなく『

3・2番目』の整理券を発行していた。

「じゃっ、じゃあ、好きな食べ物……何ですか？」

お見合いを続行している女子は無難な質問を投げかけた。日本語さえ知っているのなら誰だって答えられる質問。置きに行ったのだ。「寿司」

「あっ、私もお寿司大好きなんです」

女子は手のひらを合わせると共通点を歓迎した。初めこそ梅介の横柄な態度に動揺していたものの、意外な共通点を見つけ安心した様子で表情を緩める。

「好きなネタはありますか？」

「かつば巻き」

「うっ……あっ、そうっ！ ヘルシーですよ」

「まあヘルシーっていうか他に食ったことないからな」

「……お寿司はよくお食べになるんですか？」

一瞬言葉に詰まったが、テンポの良い女子の質問。

だがそれに対して梅介は、

「いや、葬式の時だけ」

などと答える。女子はうつむいて黙った。同時にギャラリーの顔も凍る。岩倉に至っては顔面蒼白になりながら必死に両腕でバツを作ってみせるが、想いは空しく、

「でも、もうほとんどの親戚は逝ったから次に寿司を食う機会といえど、両親が死んだときになるなあ。まあよけりゃそんなときに一緒にかつぱ巻きでも……」

女子は「ひゃあっ！」と奇声を上げて椅子からのけ反った。涙目で「この人はワイルドでもなんでもないです！」と正体を見抜くと仲間にも告げる。

すると突如、女子たちからは笑顔が消え、ゾゾゾ……と一気に表情を暗転させた。コントラストを最低出力に設定したかのような不気味な表情に三年二組は縮みあがる。

「なんだよコイツ貧乏人かよ」とギリ過ぎるミニスカートの女子。

「いきがって私服なんて着るんじゃないよ」と発育の良すぎる女子。「見てるとイライラするから早く立ち去れ！」とぼつてりした唇の色っぽい女子。

「次に近寄ったらどうなるかわかってんだろっな？ あん？」とドスを聞かせて脅迫する女子。

岩倉が言い訳する間もなく般若と化した女子たちの怒りが炸裂した。思春期の少年たちにとって、その殺傷性はロケットランチャーをゼロ距離でぶっ放されたくらいの豪快なダメージ。

シンデレラさながらの変身を遂げた梅介だったが、魔法が解かれるのは童話よりも早かった。彼女でさえ五、六時間は持ったというのに梅介ときたら三十分も続かない。岩倉という魔女に大した力 wasn't なかった。

当然というべき結末は、岩倉が次の女子を呼ぼうと声をかけた時

に起きた。

「はい、じゃあ次の『整理番号1・26』の子座って……って誰もいねえ！」

競馬場よろしく、辺りには整理券がはずれ馬券のようにくしゃくしゃに捨てられ散乱している。それだけならまだしも、藤崎梅介と岩倉智道の両者の名は卒業まで決して消えない女子のブラックスリストに登録された。ただでさえ借金まみれなのに人間関係という名の不良債権を抱えた梅介はやつれた表情で机に突っ伏す。

「やっと終わった。失ったものも大きいが、解放感も最高だ」

「あのお、まだいるんですけどお……」

「ふう、これで平穏な日常に戻る」

「聞こえてる？」

「よし、岩倉。さっさと引き揚げようぜ！」

「ねえってば！」

しつこく訴えかける声に、梅介がスツと顔を上げるとそこには、
「一年一組、ふっ、藤崎、笹乃です。よろしくおねがいします」

馬鹿丁寧なお辞儀をしたかと思いきや、うるんだ瞳でこちらの様子を伺う女子がいた。

梅介はガバツ！ と机からはね起きると、

「笹乃！ おまえここで何してる！？」

「岩倉先輩に呼ばれて、お兄ちゃんとお喋りしてって頼まれて、だから、そのお……」

くわつと振り返って岩倉を睨みつけると、両手を合わせて『すまん、誰も来なかった時の保険だったんだ』と小声で詫びを入れていた。

兄たちの感情を余所に、笹乃はもじもじしながら頬を赤らめて言う。

「お兄ちゃん……髪型変えたんだね。かつ、かつこいい……よ？」

「そっ、そうか？ ならよかった」

「うん、ワックスって高いのかな？ 今日一緒にドラッグストア寄

つてみる？」

「今日は野草採取しなきゃだろ？ それに俺たちが買える代物じゃないと思うぞ」

「じゃあいつか笹乃がプレゼントしてあげるね」

「おっ、おう。悪いな……じゃなくて、あつ、ありがとな」

照れくさそうに笑い、妹の優しさを水のように吸収して、枯れた心を癒すが、

「ハッ！」

と我に返る。

何だこれは。

いま何が起きている。

何故俺はクラスメイトの前で、なおかつキメキメの髪型で妹とほのぼのした会話を繰り広げているんだ 梅介には羞恥心に似た感情が沸々と湧き上がった。

「でも……今回は残念だったね。お兄ちゃんにはきつともつといい人が見つかると思うな」

その笑顔は、ひまわりのように目立つ花ではないものの、アスファルトに咲くタンポポのように、はかなさと力強さを併せ持つ。枯れたドクダミ草である梅介にとっては出来すぎた妹だ。

しかし、ここは自宅の小汚い茶の間ではない。

ここにいる誰しもが勉強そっちのけではあるが、腐っても学校だ。そんな場所で、妹に女子たちから罵倒されている姿を見られ、

クラスメイトに妹から諭される姿を見られ、

今の状態を『恥』以外の何で表せばいい。

そんな男が出来ることはただ言い淀むことだけで、

「いや、ちがうんだ笹乃。それは勘違いで、俺はただ……」

「うん、大丈夫。大丈夫。お兄ちゃんならきつと大丈夫だから」

などと兄をかわいそうに思ったのか梅介は優しく諭されてしまう。元々女子には興味がなかったところ、不憫な兄貴が強がっているように見えてしまうし、次はがんばるとでも言おうものなら再

び悪夢のお見合いが開催されてしまう。八方ふさがりだった。

だから、

ガシガシと落ち着かなかった髪の毛をかきむしり、

今までも、そしてこれからも着ることのないだろう服を脱ぎ捨て、
「いくら服装と髪型を変えたところで、貧乏人の俺を好きになる女
なんているとは思えない。やっぱり俺にはマーマレ堂の総菜コーナ
ーで試食させてくれる田所さん（４５歳）が一番だよ」

元のド貧乏人、藤崎梅介に戻るとそんなことを平然と言っただけ
だ。それから机に顔を押しつけると、いずれやってくるであろう
睡魔を待つ。

こうして梅介の初恋への挑戦は何の实りもなく終わった

はずだった。

突然ドアが開いて、

「遅くなつてごめんなさい」

澄みきった声が聞こえる、

「まだやってますか？」

その瞬間までは。

最後に現れたのは、天使か、それに匹敵する、

ファイナルウェポン
御慳井中学の最終兵器

久永さくら。

「あれって久永さくらじゃねえ!？」

ドアに立つ女子に向かって何人が同じ文言を口にしたことか。

さきほどまでは打って変わって、女子と男子の割合が『2:8』とむさくるしくなった室内にフツと舞い込んだ花びら。一枚のはずなのに、一人のはずなのに、まるで室内の女子率をグンと引き揚げてしまったかのような錯覚に陥るほど女の子に徹した女の子。

肩まで伸びている髪が光に反射して綺麗な天使の輪を作り、窓からそそぐ風が細い髪をさらさらと揺らして甘い香りを舞いあげる。押さえる手も細くて、しなやかで、美しい。それは寸分の狂いもない建築物のよう。されど人工ではなく天然なのだからまさに奇跡。そんな子が、いい加減なうたい文句の書かれたビラを持ちながら

ここにいます。

「これを見てきたんですけど、まだやってますか？」

しかも上機嫌で。

まずい 直感でそう察知したらしい岩倉はササッと音も立てずに久永のそばによると、

「さっきまでやってたっちゃやってたんだけど……」

ちらりと梅介に視線を送るが、そこにいるのはワイルド系どころか、髪を乱雑に散らかした男がシミだらけの小汚いワイシャツを着て机に突っ伏しているだけ。声にならない声で唸り声を上げている。まるで壊れかけのハードディスクがガリガリと音を立てているみたい。

もちろん、そんな怪しげな路上生活者を学校一の美少女に紹介できるはずもなく、

「残念だったね。君と入れ違いであいつはもう消えた。うん、二度と戻ってこないんじゃないかな？ 親の都合でフィリピンに留学したから。ははっ、残念。残念」

他のヤツらも『あいつはまあまあいいやつだった』や『フィリピ
ンから手紙が届くといいな』と言って岩倉を筆頭に三年二組総出で
藤崎梅介の存在を隠す。さすがの岩倉も去り際の女子たちに『狩る
ぞ』と小声で脅されていて、もう懲りていた。これでいい、これで
いいんだ、と一人頷く。

しかし久永は、おかしいなあ……と言った表情で、
「じゃあ……」

「ん？」

久永はスツと腕を上げて、中央を指さすと、

「あれは……藤崎くんじゃないの？」

小首を斜め四十五度にかしげて言った。

「え？」

「え？」

「え？」

またも息の合った三年二組の即席コーラス。

慌てて久永の指先とその先を点と点で結ぶが、間違いなく久永さ
くらは廃人と化した藤崎梅介を指さしていた。まさか藤崎梅介が久
永さくらに知られているだなんて、ラスボスが末端のザコ敵を把握
しているようなものだ。ゾーマが『スライムくんみつけ』と声を
かけて慣れ合っているとは到底思えない。

つまり、知られているわけがないのだ。

どうして 周りの空気を知ってか知らずか、久永は家庭科室の
中央をまっすぐ歩いて、最短距離で目的の人物に歩を進める。

ゆっくり、だが確実に一歩。

また一歩。

ふわり、ふわり、そして、ひらり、と桜の花びらのように梅介の
耳元に声が落ちた。

「ねえねえ、藤崎梅介くん」

実直で、澄んでいて、目の前にいる人物が絶対に藤崎梅介であると疑わない声。

梅介は自分の名前がフルネームで呼ばれたことにびっくりと反応すると、ワックスのせいで違和感のあった髪を雑に掻いてから、むくつと起き上がった。

しばらくうつ伏せになっていたせいで光が視力を奪うが、目を細めて声の主が誰であるかの認識に努める。

「……誰？」

数回瞬きをしてもう一度顔を伺うが、

「やっぱり……誰？」

野郎とは違う香りを放っていることから、女子であることは予想できたが、それ以上は何一つ掴めなかった。

刺すように眩しい光を振り切つて、もう一度確認するが

「ッ！」

回復した視力が見せた光景は光を遥かに凌ぐ眩しさだった。

優しくて威圧感の無い黒目の大きな瞳が、森に生息する愛らしい小動物のようにこちらの様子を伺っており、相手に自分が敵ではないことを無防備に主張している。果たしてそれが、かわいいか、かわいくないかの二択で選ばなければいけないのなら、正直 物凄くかわいかった。問答無用でルール違反の三択目が出現するくらいかわいい。妹や焼き肉をかわいいと思うのとはわけが違う、人生で初めて知ったかわいいだった。

が、それだけじゃない。

「ひい！」

思わず奇声を上げて仰け反ってしまった。

どうしてか、この女子は家族以外が踏み入れたことのない領域に平然と侵入していた。それは不意に誰かにトンツと背中を押されて

しまえば、お互いの唇と唇が触れ合ってしまうくらい敏感な距離。潤いのある淡い色の唇が臆することなく、そこにある。

当然、梅介は冷静さを欠き、

「おつ、おまおま、おまえはいつたい何だ！」

正確には『何者だ』と言おうとした。だが失敗した。原因は女子を生まれて初めてかわい意識してしまったことからきた軽いパニック。理性を保つために、椅子ごと吹っ飛ぶようにして後方に適切な距離を取ったが、スタスタと再び久永に近寄られてしまい、

「ほらっ、やっぱり藤崎くんだ！」

なんてことを言いながら再確認すると嬉しそうに笑顔を咲かす。さらに『一瞬、本当にフィリピンに留学しちゃったのかと思った』と梅介の身を案じる言葉まで送る。

この子が誰で、何が起きて、どうしてこんな状況になったのか目が光りに慣れたところで解決するほど簡単なクイズじゃなかった。

あえて一つ思い当たる節を挙げるとするなら、

「おつ、お見合いか？」

と言い切ってから梅介は考え直す。変貌を遂げていたさつきまでの自分ならまだしも、今の自分はいつも通りの死神だ。目的がお見合いならとくに他の女子たちのように立ち去っているはず。好き好んで『職業は魂を狩ること』なヤツと仲良くなりたいと思う特別な女子がいるはず

「うん、お見合いに来たの」

いた。

まさかまさかの本当にそんなヤツがいた。

こいつは視力でも悪いのだろうか、なるほどそれならば近距離で自分の顔を眺めていたのもわかる。そう思った梅介は寝ぼけ眼だった顔を引き締めてから確認する。

「こんな……」

ボロボロの学生服を着ていて、

好き放題に乱雑と跳ねまくる髪型で、

一年くらい寝てないんじゃないかってくらい淀んだ瞳をした、

「ド貧乏のこんな……俺とか？」

「もちろんだよ。そんな藤崎くんに会いに来たんだから」

久永の答えにわずかの迷いもなかった。

今日、梅介が四苦八苦した全てがどうでもいいことと、何も変化しなくてもそのままの梅介でいいんだと、久永という女子はまるでそんなふう言っている。明らかにビラのうたい文句に釣られてやってきた他の女子とは違う。死神の前で無垢に微笑みかける久永に、油断したらこちらまで綻はなんでしまいそんな魅力があった。

そんな魅力は梅介の理性さえをも狂わせ、言語機能に浸透し、

「かわ……い……い……」

思わず漏らしてしまった声にならない声。望んでいたわけではないのに、梅介は呼吸をするかのように無意識のうちに心の想いを声に乗せてしまっていた。

「え？ なに？ もう一回言ってくれかな？」

「いや、ちがう！ かわいい、そう、河合を呼んだんだ！ 河合はどこだ！」

前言の隠ぺいに徹するあまり、御櫓井中学の鬼と呼ばれている不良の名前を挙げてしまった。今さら引き下がるわけにもいかず息巻いて『体育館裏に呼び出せ』とまで言ってしまった。後悔はしている。それでも今だけは絶対に『かわいい』を言葉にしたくなかった。なんなら一生『かわいい』が言えなくなってもいい。恥ずかしくて、情けなくて、怖くて、不覚にも女子に魅了はされてしまったことを隠すのに必死だった。

「とにかく！ 俺は最近調子に乗ってる河合を呼び出しただけであつて、おまえをかわいいと思ったことは人生で一度もない！」

呆れかえるほどに中学生らしく粋がつてみせる梅介だが、久永は違った。思春期の遠回しの想いを理解したらしく、恥ずかしそうに微笑んで『ありがとう』と素直に受け止めてくれるほどの素敵な女

子だった。だがどうにも梅介にはこそばゆい。

「なっ、なにがありがとうだ！ 人の話を聞いているのか？ 俺はおまえがかわいくないって言ってるんだ！」

「うん、ありがとう」

「ぬぁ！ だから俺は……」

「ほんとにほんとにありがとう。すつごく嬉しい！」

一枚も二枚も百枚も久永の方が上手^{うわて}だった。

梅介もやられっぱなしでたまるか、と会話の主導権を握るために懸命に久永の弱点を探るものの、

ブス かわいいし。

バカ 利発そうだし。

貧乏 それは俺だ。

些細なことでもよかったのに欠点なんて一個も思い浮かばなかった。だから、

「おっ、おれおれおれをおちよくりやがって、じつ、自分が誰にでも、かつ、簡単にすすす、好きになってもらえると、おっ、思うなよ！」

今の梅介にできる精一杯の反抗がこれだった。短くまとめると『ぎゃふん』で、深読みすると『好きです』だ。本人は混乱しているせいで口走っている内容の重大さに気が付いていない。

しばらく黙って様子を伺っていた三年二組＋岩倉フィーチャリング笹乃も予想だにしない展開にざわつき始める。

「梅介のヤツ……惚れたな」と二枚目風に気取って見せた岩倉。

「なあ、あいつ恋したことないって言っただけだったか？」と痛いところをつく鈴木。

「もしかして恋しない俺カツコイイみたいに思ってたんじゃない？」と中二病を指摘する高橋。

「お兄ちゃんがんばれ」とこぶしをグツと握って応援する笹乃。密かなる想いを梅介に寄せていたブスラ以外は割と好意的な反応を見せた。

おかしい、今日の自分は何かがおかしい、梅介は押し寄せては波打つ感情に戸惑いを隠せなかった。このまま久永と会話を続けていたらどうにかなくなってしまふ。

「もうおみ、お見合いは、終わった。だから帰れ……」

「え？ でも……」

久永は壁掛け時計を確認した。昼休みが終わるまであと十五分くらい。幸か不幸か他の女子たちが早々に立ち去ってしまったことで若干の余裕が残されていた。

「ね？ 少しでいいから。私、藤崎くんと一度ちゃんとお話してみたかったんだあ」

ずっと溜め込んでいたかのような積年の思いをストレートにぶつけた久永。受け取りやすいはずの直球ののだが、女子とともに会話のキャッチボールをしたことのない梅介には速度が速すぎた。癖のある魔球にさえ思える。

「俺はおまえに興味はない。だから帰れ」

覚えたてホヤホヤの感情を押し殺し、自我を守るために冷徹に言った。

しかし正直な視線は、中毒性のある久永の愛らしい瞳にばかり囚われて……。

「もう、そんなに見られると恥ずかしいよ？」

久永はわずかに口角を上げると、子供に問いかけるように優しく言った。

が、恋愛偏差値の低い梅介は赤点をたたき出す。

「ちっ、違う！ 目に、おまえの目にゴミが溢れんばかりに付いてて！ だから、その……とにかく！ おまえの目にはゴミがてんこ盛りなんだ！」

本当はゴミどころか濁りさえ一切なかったのだが、真に受けたい久永は『うそ？ どこに付いてる？ 取ってくれないかな？』と言って、またもや梅介の鉄壁であったはずの領域に不法侵入を開始。梅介は右手という名の海上自衛隊と左手という名の航空自衛隊

で外敵を必死に追い払うが、それらは白くて柔らかい手に包まれてしまい、

「振り回すと危ないでしょ？」

メツと穏やかに叱られてしまった。

「ばっ、馬鹿にしゃがって！ おれ、おれおれの手をはっ、はなせい！」

言葉とは裏腹に、久永の手のひらから伝わる温もりはこの世のものとは思えないくらい心地よかった。力を抜けば自然と振り落ちるはずなのに、それなのに、なぜかこうしたまま……。梅介は恐怖と期待の絡み合う複雑な感情に自分を見失いかけていた。

「もう振り回しちゃ駄目だからね？」

そう言って久永は梅介の手から自分の手を引き抜こうとするが、
「きゃっ！」

実は梅介もそつと握り返していたせいで、手を放そうとした久永を逆に引っ張ってしまった。後悔しても時すでに遅し、そのまま久永の華奢な体は、おとつと、とバランスを崩してしまい

倒れる！

と見せかけて片足立ちでその場をくるりと一回転すると、なんとか持ち直して体勢を整えることに成功

したかと思いきや今度は小さな両足を一齐に滑らせると、両手を広げてキュートな悲鳴を上げながら梅介に向かって一直線にダイブ！

「ひゃっ！」

「ぬおお！」

こんなものをダイレクトに受け止めてしまったら確実に頭がおかしくなっちまう。そう思った梅介は体を反転させてこの場から離脱することを試みるが……。

いや待て。

自分がこの場から退いてしまえばコイツが華奢な体を地べたに打ち付けてしまふ。しかもコイツは既に受け止めてもらえるものだと

思つてこちらに向かつて期待感で瞳をいっぱいにしているではないか。

どうする　考える猶予はさほどもなかった。

チツ、チツ、チツ、と時は一秒の百分の一で流れ、

結果は、白目をむき出しにしながら泡を吹いて倒れている男子と、そんな男子の胸元に顔を埋めているセミロングヘアの女子がいた。

梅介は男としてあるべき選択をしたが、あまりの興奮に気絶してしま

つてたまるかあ！　と本日二度目の気絶を回避するとわずかに残ったヒットポイントで、久永を胸元から追い出し、ずるずると尻を地べたに付けたまま後ずさりする。

「ぜえぜえぜえぜえ……はあはあはあはあ……」

この女は危険だ。

この女は危険だ。

この女は危険だ。

自分が自分でいられなくなる。

だがどう考えてもケツで移動する生物よりも二足歩行の人間の方がスピードが速く、

「ありがとう藤崎くん。大丈夫だった？」

久永に満面の笑みで追い付かれてしまった。

「ぎゃあああああ！」

「どっ、どうしたの？　大丈夫？　すっごい汗！」

久永は綺麗にたたまれたピンク色のハンカチを差し出すが、

「来るな！　寄るな！　立ち去れ！」

幻覚でも見ているかの如く必死だった。チェック柄のスカートに閉じ込められていた魅惑の香りを嗅いでしまったらクロロホルムを超える作用に襲われてしまいそんな気がして。しまいには『警察！警察！』と国家機関にまで助けを求めることに。連行されることになるのはこの精神異常者なのだが。

しかし梅介が強烈な拒絶反応を示した直後、久永はしゅんとして、

あれだけ眩しかった瞳を俯^{うつむ}けてしまった。うなだれた肩に、どこか雰^{ふん}囲気にも覇気がない。さすがに警察まで呼ばれたのには傷ついたらしい。はらり、とその場に久永の香りの染み込んだハンカチが零れ落ちた。

あわあわ、なんてことを！ 自分はこんなにも素敵な女子を悲しませてしまった

「ってちがああう！」

精神の歪みが尋常じゃなかった。恋愛耐震強度の低い梅介のハートは久永の一挙手一投足にグラグラと大げさに揺さぶられ、半壊どころか全壊の危険は間近だった。

しかしこの動揺は恋のせいではない、わざとドキドキしてやっているのだと自分に言い聞かす。だが今の気持ち^{きもち}が『故意』か『恋』なのかを正直に問いただと、その気持ちは限りなく『恋』に近いわけで、もしかしたら自分は恋をしてしまったのではないかという驚きと、ほぼ一目ぼれという軟弱さに苛立ちさえ感じた。そうして心奪う久永に対してたまらなく悔しくなるのだ。

悔しくて、悔しくて、あと一步で憎くなるほど悔しいのに、出てくる言葉はそんな相手を気遣う言葉で、

「おつ、おまえが……使ってほしいなら……使ってやらないこともなくもない気がするような感じだな」

曖昧な返事に久永は一瞬、戸惑った様子を見せたが、前向きな提案は夜から再び昼へと久永を連れ戻した。落ちたハンカチを拾い上げると、はたいてからスツと梅介に差し出す。

「どうぞ、使って」

「おつ、ちゃんと……洗って返すから」

「うっん、気にしなくて大丈夫だよ？ 私たくさんハンカチ持っているから」

久永は手をヒラヒラと左右に振って返却無用であることを示したが、

「ダメだ。借りたものはちゃんと返す」

などと、いつちよまえのセリフを吐くことができた。果たして、先ほど下げてしまった自分の高感度は再び上昇しただろうか。自然とそんなことを考えてしまっている藤崎梅介は、どうやらついさつきまで見ず知らずであつたはずの久永さくらに懐柔されつつあつた。

そう、見ず知らずの女子に。

懐柔されつつあるとはいえ、梅介には久永のような可憐な女子に、なぜ自分のことを知られているのか合点がいかなければ、今日初めて会ったばかりとは思えないほど馴れ馴れしく接してくる久永に不可解さを感じていた。自分の方が忘れてしまっているのではないかと記憶に疑いを掛けるが、それと同時に、一度見たら忘れるはずがないだろうと不思議な自信もあつた。

「なっ、なあ……俺はおまえの知り合いなのか？」

ふざけたことをすぐに逃げ出せるだけの間合いをとって聞く。

「おまえは俺を知っているみたいだけど……俺には記憶にない」

極めて簡単な質問で、迷うことなく答えてくれると思って尋ねてみたのだが、

「それは秘密かな。だって教えたなら藤崎くんに嫌われちゃうもん」

梅介はすぐさま振り返って笹乃に『この人知ってる？』と尋ねるが困惑した面持ちで首を横に振られてしまった。こぶしをグッと握って『お兄ちゃんがんばれ』ってささやかながらエール。

「なるほど、俺の先祖がおまえの先祖に殺されたとかだな？ このやろっ！」

久永はクスリと微笑んでから言う。

「うっん、そんなスピリチュアルな問題じゃなくて」

梅介にはスピリチュアルの意味はわからなかったが、奇問、難問、珍問に、さきほどまで音を立てていたハードディスクは発火して煙まで上がってしまいそうだった。

その後も関係性を思いつくままに問いかけてみるものの、真実は迷宮入り。

しまいには、

「私は久永さくら。よろしくね」

チョコレートを溶かして声に混ぜているのではないかと思うほど甘ったるい声で仲良くしようと言われてしまった。食べ過ぎならぬ聞き過ぎで鼻血が出るのも時間の問題。

「それで……お見合いってまだしてくれるのかな？」

「おふっ！」

不意打ちのジャブによるめく梅介。

しかし梅介には『うんっ！ お話しようぜ！』などという軟弱なセリフは口が裂けようと、いや、命絶えようと言葉にすることはできない。そんな言葉を吐く前に、脳内で軟弱な自分を何度も何度も殴り殺した。だがそれでも頭からおびただしい大量の血を撒き散らしながら『久永さくらとお話してみたい』と希望を馳せる自分^{ソレヒ}に落胆する。

「ねっ、ねっ、いいよね？ だめ……なのかな？ むう……」

時に天真爛漫に、時に甘えた子供ののように、巧みに攻める久永に、ついに梅介の牙城は崩された。

「しっ、仕方ねえな。ああ、だるい、だるい。すっごいだるい。ほんとはずごく嫌だけど、わざわざ来てもらったわけだし、暇つぶし程度に十五分くらいなら……」

「五分でもよかったんだけど……ありがとう藤崎くん！ 優しいね」
恥ずかしさのあまり顔面がマグマの如く火を噴いた。何が十五分だよ、これじゃあまるで自分の方が張り切っているみたいじゃないか 梅介はノックダウンされたかのようにフラフラと近くにあった椅子に腰かける。久永も梅介の目の前に椅子を運んでくると、近距離にセツトし、ゆっくり席に着いた。

とはいえ、梅介から話題を提供するだなんてことができるはずもなく、出来ることと言えば、ただ体を丸めて小さく椅子に座るだけ。ちゃんと呼吸ができているのかも怪しい。

だがそれもそのはず、梅介は全てが整った豪華客船を目の前にし

て心が沈没しそうだった。

こちらのスペックは非常識なほど悪い。例えるなら既に沈んだ泥船だ。

所持金ゼロ。

制服極端に短し。

革靴穴だらけ。

顔中途半端。

栄養失調。

学力悪し。

これほど揃うと、この男はカンボジアの小学生かと勘違いしてしまいそうになるほど。いいや、それ以上だ。勉強に関してはカンボジアの小学生の方が比べ物にならないくらい意欲が高い。

だからこそ、梅介は自分がそんな低スペックな人間であると思っているからこそ、どうしても解消しておきたい最大の疑問点があった。

「始める前に一つだけ教えてくれないか？」

こくりと頷いてから黙って話の続きを促す久永に、梅介は言葉を紡ぐ。忘れてしまった言葉を思い出すかのようにゆっくり、様子を窺いながら。

「どうして……俺なんかに……会いに来たんだ？」

たったそれだけのことなのに、喉から手が出るほど答えが待ち遠しかった。

声は届いたのだろうか、そんな一抹の不安が過るほどの間が体感で流れ、それでもちゃんと聞こえていたらしい久永はゆっくり唇を開き、

「藤崎くんに幸せになってほしいの」

この瞬間、世界で一番綺麗な音色が喉を伝った。

俺に幸せになってほしいから会いに来た。

本当にそんな物好きなやつがいるならそいつは

ただの天使じゃないか。

5 (後書き)

これで1章は終わりとなります。

一人称＋三人称での不自然さの解消や、展開の早い遅いなど課題はたくさんありますが、勉強しながら続けていきたいと思っています。もし、このネタが面白かった、つまらなかったなどがありましたら参考にしますので感想に一言お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8739s/>

閃光ゼロ距離センチメンタル！

2011年5月14日13時55分発行